

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：37406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04393

研究課題名(和文) 幼児におけるネガティブではない泣きの表出と理解の発達

研究課題名(英文) Development of expression of crying and understanding emotional reasons for crying in preschool children in non-negative situations

研究代表者

和田 由美子 (Yumiko, Wada)

九州ルーテル学院大学・人文学部・教授

研究者番号：70302362

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：母親へのweb調査の結果、「安心」による泣きを示す幼児では、泣きやすい傾向と泣きの抑制傾向の両方が見られたが、「成功・勝利」「感動」による泣きではいずれの傾向も見られなかった。「安心」による泣きは、泣きたくなる状況が生じ、その状況で泣かずに我慢する能力の発達に伴って生じるが、「成功・勝利」「感動」による泣きは異なる認知的要因によって媒介されている可能性が示唆される。ネガティブではない泣きを表出する幼児ではうれしい理由での泣きを理解している割合が高かったが、うれしい泣きを理解している幼児の半数以上は表出経験がなく、ネガティブではない泣きの表出経験は理解を促進するが必須ではないと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

泣きの研究の多くは乳児または成人を対象としており、幼児期の泣きの発達過程についての実証的研究は少ない。本研究はネガティブではない泣きが幼児でも見られること、安心による泣きが一般的な泣きやすさと泣きの抑制の両方に関連して生起すること、成功・勝利や感動による泣きには異なる認知的要因が関わっていることを実証的に示したものであり、幼児の感情発達についての重要な基礎データになると考えられる。ネガティブではない泣きは、感情制御能力や他者の感情の理解能力など、様々な認知・感情発達と関連して生じてくると想定され、その発達過程の解明は幼児の感情発達を理解するための新たな切り口になることが期待される。

研究成果の概要(英文)：The result of a web-based survey to mothers with preschool children showed that preschool children who cried with "relief" showed both a tendency to cry easily and suppress crying, while preschool children who cried with "success/victory" and "impression" showed neither of these tendencies. The results suggest that crying due to "relief" occurs as a result of the development of the ability to suppress crying even if they feel like crying, while crying due to "success/victory" and "impression" may be mediated by different cognitive factors. Although a higher percentage of preschool children who expressed non-negative crying understood crying for happy reasons, more than half of the preschool children who understood happy crying had never expressed it, suggesting that the experience of expressing non-negative crying promotes understanding emotional reasons for crying but is not essential.

研究分野：感情心理学

キーワード：泣き 発達 幼児 感情

## 1. 研究開始当初の背景

泣きは自分の感情状態を他者に伝える重要な信号である。人前で泣くことには、助けが必要な状態であることを他者に伝え (Provine, Krosnowski, & Brocato, 2009)、他者からの援助を引き起こす効果があるが、人前で泣くことが仲間からの嘲りやいじめの原因になる場合もある (Schwartz, Proctor, & Chien, 2001)。また、人前で泣くことが、情緒不安定、無能、弱い等のネガティブな人物評価につながることもあれば、暖かい、共感的、信頼できる、誠実、攻撃的ではない等のポジティブな人物評価につながる場合もある (Hendriks & Vingerhoets, 2006; Vingerhoets & Blyma, 2016)。場面に応じて適切に泣きを表出・抑制する能力は、他者からの援助や、社会における適切な評価を受けるために重要であることから、年齢に応じた泣きの表出・抑制の様相を把握し、適切な感情発達を支援していく必要があると考えられる。

幼い子どもの泣きの原因は、当初は痛みや欲求不満のようにネガティブで自己中心的なものであるが、発達に伴って、他者からのネガティブな結果の予期 (嘘をついた後で叱られる) や、他者への共感によっても泣きが生じるようになり、さらに年齢が進むと詩・映画・小説・音楽など幅広い刺激に対する反応として泣きが起こるようになる (Vingerhoets, Blyma, & Rottenberg, 2009)。実際、「最近泣いた理由」について成人にたずねた調査では、喪失、葛藤、苦しみを目撃などネガティブな理由だけでなく、ポジティブな出来事を目撃も上位にランクインしていた (Vingerhoets, 2013)。

ネガティブではない状況での泣き (以下「ネガティブではない泣き」) は何歳ごろから見られるようになるのだろうか。ネガティブではない泣きを初めて経験した年齢とエピソードについて、大学生に回答を求めたところ、8.8%の学生の初発エピソードは幼児期 (3~6歳) であった (和田・吉田, 2015)。また、現役の保育士・幼稚園教諭の3人に1人 (33%) が幼児のネガティブではない泣きを直接観察した経験を持っていることから (和田・井崎, 2020)、ネガティブではない泣きの萌芽は幼児期に存在すると考えられる。

幼児期にネガティブではない泣きの萌芽が見られるのだとすれば、ネガティブではない泣きを示す幼児と示さない幼児にはどのような違いがあるのだろうか。ネガティブではない泣きは、感情をコントロールする能力や他者の感情を理解する能力など、様々な感情発達と関連して生じてくると想定されることから、その発達過程の解明は幼児の感情発達を理解するための新たな切り口になることが期待される。

## 2. 研究の目的

本研究では2歳から就学前の幼児の母親への質問紙調査により、幼児期においてネガティブではない泣きがどのように発達していくのかについての基礎データを得ることを第一の目的とする。またネガティブではない泣きを示す幼児と示さない幼児の違いについて、一般的な泣きやすさ、泣きの抑制能力、泣きの理解能力から検討することを第二の目的とする。

## 3. 研究の方法

当初の計画では、幼児期の泣きの様相については保護者への質問紙調査、ネガティブでない泣きの表出と理解の関係については対面またはオンラインで幼児に直接調査を行う予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で期間内での直接調査実施が難しく、最終的にはすべてをweb調査で検討することとなった。

**調査対象者と調査方法:** インターネット調査会社のモニター登録をしている2歳児 (2~3歳児)、年少 (3~4歳児)、年中 (4~5歳児)、年長 (5~6歳児) の男児、女児の母親各300名、合計2400名を対象としてweb調査を行なった。調査期間は202X年3月23日から3月25日であった。

**調査項目:** 幼児および保護者の属性等に関する質問に加え、以下の項目について回答を求めた。

(1) 最近6ヶ月の泣きの理解・抑制など (6項目): はい(5)、たぶんはい(4)、どちらともいえない(3)、たぶんいいえ(2)、いいえ(1)

(2) 最近6ヶ月のネガティブな泣き (6項目) および泣き方 (4項目): よくあった(5)、ときどきあった(4)、まれにあった(3)、わからない(2)、なかった(1)

(3) 生まれてから今までネガティブではない状況 (5項目) および共感によって (2項目) 泣いたことがあるか (涙ぐむことも含める): はい(5)、たぶんはい(4)、どちらとも(3)、たぶんいいえ(2)、いいえ(1)

#### 4. 研究成果

##### (1) 幼児期におけるネガティブではない泣きの出現率(表1)

ネガティブではない状況を例示し、そのような状況でお子様が泣いたことがあるかどうかについて尋ねた結果、「はい・たぶんはい」と回答した人が最も多かったのは、「安心したとき(平均30%)」、次は「好きな人(親、祖父母、担任、友人など)と再会したとき(平均12%)」であり、2歳児から年長児までの間の出現率に大きな違いは見られなかった。「イベントやパフォーマンスなどに感動したとき」の泣きの出現率は、女兒は年中、男児は年長で増加し、年中(男児:4%, 女兒10%)、年長(男児:9%, 女兒14%)ともに男児より女兒で有意に多かった。

表1 ネガティブではない泣きの出現率(%)

質問項目	性別	2歳	年少	年中	年長	性差
1 安心したとき	男	28	29	26	35	年中*
	女	28	32	34	30	
2 好きな人(親、祖父母、担任、友人など)と再会したとき	男	12	10	8	15	ns
	女	16	10	12	10	
3 発表会や試合、ゲームなどで成功・勝利したとき	男	3	2	4	6	ns
	女	3	4	6	8	
4 ほめられたり、やさしくされたとき	男	5	7	8	8	ns
	女	7	7	8	11	
5 イベントやパフォーマンスなどに感動したとき	男	3	3	4	9	年中**
	女	2	4	10	14	

性差は年齢別に実施した2(男女)×3(回答)の<sup>2</sup>検定の結果:\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ ,

##### (2) 幼児におけるネガティブではない泣きと関連する要因

###### ネガティブではない泣きの相互関係

ネガティブではない泣きの各項目の得点についてスピアマンの順位相関係数を算出したところ、「好きな人と再会したとき」「発表会や試合、ゲームなどで成功したとき」「ほめられたり、やさしくされたとき」「イベントやパフォーマンスなどに感動した時」の間には中程度以上の正の相関が認められた。一方「安心したとき」は「再会」「ほめ・やさしさ」との間に中程度の正の相関を認めたが、「成功・勝利」「感動」との間には弱い正の相関しか認められなかった。すなわち「安心」による泣きは「再会」「ほめ・やさしく」との関連が強く、「成功・勝利」「感動」との関連が弱いといえる。

###### ネガティブな泣きとの関連

ネガティブではない泣きとネガティブな泣きの各項目の得点についてスピアマンの順位相関係数を算出したところ、「好きな人(親、祖父母、担任、友人など)と別れる時に泣く」と「好きな人と再会したとき」の泣きとの間に弱い正の相関が見られた。再会による泣きと別離による泣きはいずれも特定対象への愛着という共通の背景を持つためと考えられる。安心と不安、失敗・敗北と成功・勝利も共通の背景を持つと考えられるが、再会と別離を除き、ネガティブな泣きとポジティブな泣きとの間に相関は認められなかった。

###### 泣きやすさとの関連

<sup>2</sup>検定の結果、「1日中一緒に過ごす、最低1回は泣きますか」に「はい・たぶんはい」と回答した幼児では、「安心したとき」「好きな人と再会したとき」に泣いたことがあるとの回答が有意に多かった。また、「同年齢・同性の子どもと比べて、よく泣く方ですか」に「はい・たぶんはい」と回答した幼児では、「好きな人と再会したとき」「ほめられたり、やさしくされたとき」に泣いたことのあると回答した人が有意に多かった。一方、泣きやすさと「成功・勝利」「感動」による泣きの関連は見られなかった。

###### 泣きの抑制との関連

<sup>2</sup>検定の結果、「泣きそうになった時に、泣くのをがまんすることがありますか」に「はい・たぶんはい」と回答した幼児では、「安心したとき」「ほめられたり、やさしくされたとき」に泣いたことがあるとの回答が有意に多かった。一方、泣きの抑制と「再会」「成功・勝利」「感動」との関連は見られなかった。

###### 泣きの理解との関連

「状況に応じて、泣いている人が『うれしい』ことがわかりますか」に「はい・たぶんはい」と回答した幼児の割合は発達に伴って増加し、年長児では男児56%、女兒62%であった。

<sup>2</sup>検定の結果、いずれの項目においても、ネガティブではない泣きを示したことのある幼児では、うれしい泣きを理解していると回答した割合が有意に高かった。

### (3) まとめ

幼児において一番多く見られるネガティブではない泣きは「安心」による泣きであり、これは一般的な泣きやすさと泣きの抑制の両方に関連していた。また、「安心」による泣きは、「再会」「ほめ・やさしさ」による泣きとの関連が強く、「成功・勝利」「感動」による泣きとの関連が薄かった。「成功・勝利」「感動」による泣きは、一般的な泣きやすさ、泣きの抑制のいずれとも関連していなかった。このことから、安心による泣きは、泣きなくなる状況が生じ、その状況で泣かずに我慢する能力が発達することによって生じるが、「成功・勝利」「感動」による泣きは異なる認知的要因によって媒介されている可能性が示唆される。今後は、「成功・勝利」「感動」による泣きを示す幼児の特徴を明らかにすることにより、ネガティブではない泣きの種類による背景要因の違いを解明していきたい。

泣いている人が「うれしい」ことがわかる幼児は、ネガティブではない泣きを示すことが多かったことから、ネガティブではない泣きの理解が表出経験と関連を持っていることが示唆された。しかし、ネガティブではない泣きの表出率が最大 35%（安心による泣き：年長の男児）であったのに対し、うれしい泣きを理解している幼児は最大 62%（年長の女児）で、理解率が表出率を大きく上回っていたことから、ネガティブではない泣きの表出経験はうれしい泣きの理解に必須ではないといえる。

今回得られたうれしい泣きの理解のデータは母親の回答によるものであり、当初予定していた幼児への直接調査に基づくものではない。新型コロナウイルスの感染状況が落ち着き次第、幼児への直接調査でも同様の結果が得られるかどうかを確認する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 和田由美子・井崎美代	4. 巻 19
2. 論文標題 幼児におけるネガティブではない泣きの直接観察事例の分類－保育者への質問紙調査から－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心理・教育・福祉研究	6. 最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 和田由美子・井崎美代
2. 発表標題 幼児におけるネガティブではない泣きの生起状況の分類－保育者への質問紙調査より－
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	井崎 美代  (Izaki Miyo)	九州ルーテル学院大学・人文学部・准教授  (37406)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------